

ぼくは探検家だ。きょうはヘツ  
コロ島という無人島へ行く。

そこにはホッコロ沼という場所が  
あって、なぞのヌシがすみついてい  
るらしい。正体を見た者はない。そ  
いつを釣り上げてやろう、という計  
画なんだ。

島の持主は百歳ちかいおじいさん  
で、島が見える港町にひとりであ  
している。

「あの島はハア、先祖代々うち  
のものじゃが、ずっとほったらかし  
である。五、六人ばかりヌシを釣り  
上げに出かけたやつもおったがハア、  
みんな手ぶらで帰ってきたな。動物も少しいるが、クマや  
毒虫やヘビはおらんからハア、心配せんでええ。もしヌシ  
を仕留めたら、礼はいらねえけど、一回だけ見せに来てく  
れ。あの世のみやげに楽しみにしてっからよ」

何だかうれしそうに話すじいさんに見送られて、ぼくは  
モーターボートで島をめざした。

島にはものの三十分ほどで到着した。濃い緑におおわれ  
た、茶碗をふせたようなかたちの島だ。

せまい入江をみつめて、その浜にボートをつなぐ。  
森の入口の小高いところに、手つとり早くテントを張っ  
た。二、三日はここで野営するつもりだ。それだけあれば、  
腕のいいぼくにはじゅうぶんだろう。

まだお昼まえだ。ぼくの経験ではうまくいく時はたいて

お は な し 定 期 便

## へツコロ島奇譚

舟崎 克彦 (文・絵)

「おはなし定期便」は、子どもたちへの「読み聞かせ」や  
「朝の読書」の時間などにご活用ください。

い初日に結果が出る。テントに泊ま  
る必要はなくなるかもしれない。善  
は急げ、だ。

ぼくは釣り道具一式を小わきにか  
かえると、木々をかきわけて斜面を  
のぼって行った。

小山のてっぺんにホッコロ沼はあ  
る。深い木立ちのすきまから、乳緑  
色ににぶく光る沼が見えてきた。

岸辺の、すわりごちのよさそ  
うな石に腰を下ろすと、さっそく竿の  
しかけにとりかかった。相手はきつ  
と大物だろうから、フライより魚粉  
ダンゴの方がいいだろう。

ぼくは盛大にコマセをまくと、池の中央めがけて糸を投  
げた。

ポチヨン……とぼけた音を立てて、エサがしずんで行く。  
あぶくが二つ三つ上がったきり、水辺はしずまりかえった。

無人島での釣り。なんてのびのびした気分なんだろう。  
ぼくはなんども深呼吸した。

と、しばらくしてぼくは、周囲のしげみの中から、何者  
かがこちらのようすをうかがっている気配を感じた。

「人か……?」

いや、人がすがたをかくせるほど、大きなやぶはない。  
ちよつといごちが悪くなつて、セキばらいをしてみる。

すると、まわりのしげみの中からも、セキばらいがかえっ  
てきた。

「あーあ」

つぎにあくびをしてみると、まわりからもあくびの音が  
おこった。

「だれだ!?」

と、声をかけると、「だれだ!?」と聞きかえしてきた。  
その時、竿にあたりがきた。浮子がぐくぐくと水の中に  
引きこまれる。

「来たぞ!!」

もう、まわりの連中が何者なのか、なんて気にしている  
ところではない。ぼくは池にむき直って、竿をわきにたく  
しこんだ。

ものすごい引きだ。

水底に一気にもぐったかと思うと、ぐるぐると泳ぎまわ  
る。うっかりすると水辺に足をとられてしまう。歯をくい  
しばって、岩場に足をふんばった。

腰を浮かすと水中に引きずりこまれそうだった。まさしく沼  
のヌシにちがいない。一体なんていう魚なんだ。それとも  
伝説のカッパか。

「おっとっと……」

つんのめって水に落ちそうになる。

その時、うしろからぼくの腰を支えてくれる者があつた。  
横目で見ると一匹のタヌキだ。びっくりしているひまも  
ない。

「あ、ありがとう……」

やっこのこととひと言いうと、また竿が深みに引きこまれ  
た。

「おい、みんな!!」

ぼくの腰にツメを立てていたタヌキが声を上げた。

すると、まわりのしげみをガサゴソさわがせて、鳥の動  
物たちがとび出してきたんだ。

アナグマがタヌキにしがみつくと、アナグマをだきとめる  
のはイノシシだ。イノシシにだきついているのはキツネ  
だった。

カワウソが水中にとびこんで、ようすをさぐりに行く。

しばらくして水から顔を出すと、

「しっかりくらいいついてるぞ。みんながんばれ!!」

と、水かきのついた手をまわした。

「よしきた、がんばれ」

「おいっち、にっ、おいっち、に!!」

動物たちのかけ声にあわせて、釣り竿を引く。やがて竿  
が三日月みたいにになると、えものが上がってくる手こた  
えになった。どうとう力がつきたのか。

「それ、もう少しだ!!」

今度はぼくがかけ声をかける。と、しずんだ糸のさきか  
ら、黒く大きなものの影が少しずつ浮き上がってくる。

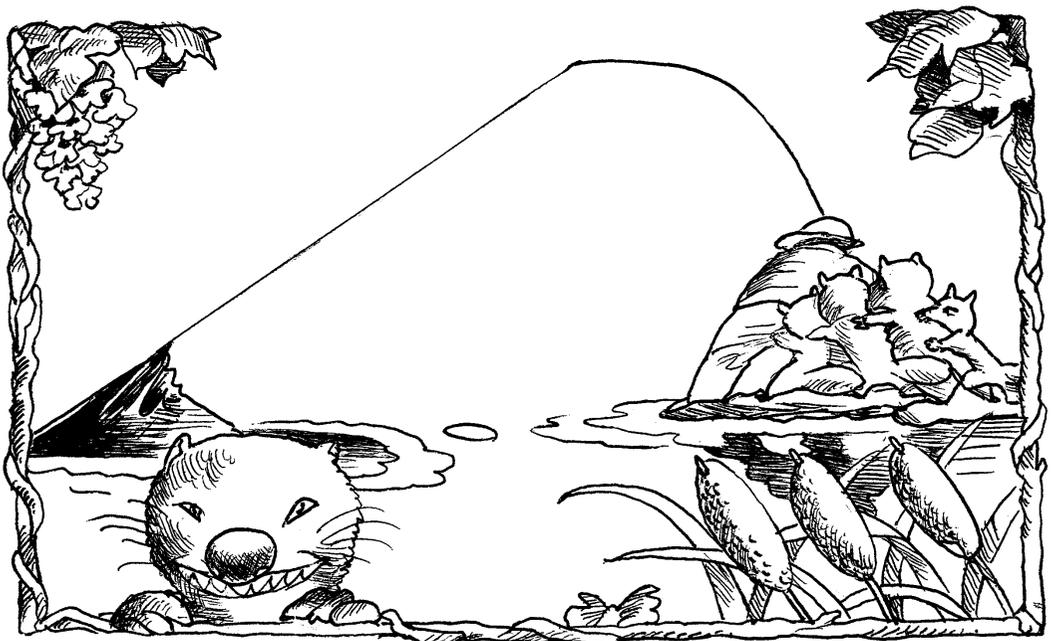
それはみるみる水面いっぱいに広がってくると、やがて  
糸のかかった先つちよを水の上に出した。

針はヌシの口にかかったのじゃなかった。体の一部を  
ひっかいたらしい。ぬれて光る、ずんぐりしたかたまりだ。  
しかもとてつもなくでかい。

「それ引け」

「もうひといき!!」

号令をかけたつづけて引っぱると、そいつの影が水面いっ  
ぱいに広がってきた。



「沼よりでかかったりして……そんなバカな」

あつけにとられながら、なおも引きよせると、こんどは  
まわりの木立ちがザワザワゆれはじめ、つぎにはバタバタ  
とたおれ出した。

まるで地の底から根こそぎ引っぱられているようなお  
れ方だった。その時、ぼくははじめて気づいたんだ。

「ぼくが今ひっかけているのは、沼のヌシじゃなくて、  
沼の底なんじゃないか?」

そのしるしに釣り竿をほうり出すと、黒いかげはゆっく  
りと沼の奥にしずんで行き、入れかわりに木々が体を立て  
はじめた。

ふと見ると、さっきの動物たちはかげもかたちもなく  
なっている。

「ヒヤーン」

ぼくは背筋が寒くなるとその場からにげ出した。

やっぱリテントに泊まる必要はなかった。

帰りのボートから島かけをながめながら、ぼくは自問自  
答していた。「釣り糸を引っぱりまわしていたんだから、  
生き物がかかっていたのにちがいないんだけどなあ……」

じいさんにあいさつに行くと、

「そうかハア、やっぱダメじゃったかね、フェツフェツ  
フェツ……」

カワウソみたいな顔で笑った。



舟崎 克彦 (ふなざき よしひこ)

童話作家。1945年東京都生まれ。『ぼっぺん先生と帰  
らずの沼』(筑摩書房、岩波書店)で第4回赤い鳥文  
学賞、『雨の動物園』(偕成社)で国際アンデルセン賞  
優良作品賞受賞、『ぼっぺん先生』物語シリーズ(筑摩  
書房)で第11回路傍の石文学賞を受賞。『悪魔のりんご』  
(小学館)で第13回日本絵本大賞受賞。現在、白百合  
女子大学教授。